

英語学習方法に対する学習意欲に関する研究

—— 学習動機と学習意欲の関係 ——

池 上 真 人

1. は じ め に

英語学習方法に関する情報は巷に溢れている。書店に行けば、どのようにして英語を勉強すれば良いのかをテーマにした書籍は非常に多く出版されており、様々な「英語の達人」が、どのようにして英語を学習してきたのか、どのようにして英語学習を成功させたのかなどを紹介している。しかしながら、それらの多くは筆者の個人的な学習経験の紹介であって、その中から、学習者が自分に合った学習方法、つまりやる気になれるような学習方法を見つけることはなかなか難しい。実際、様々な書籍に記されている「効果的」と銘打たれた学習方法を読んでも、今ひとつ気乗りがせず、やりたいと思えないということはしばしば経験することである。

学校という現場で、教師が学生に学習方法を勧める場合も同様である。同じ学習方法を勧めても、やる気になる学生もいれば、全くやる気を見せない学生もいる。さまざまな学習方法がある中で、すべての学生がやりたいと思うような英語学習方法を提示することは非常に困難であることは当然であるが、個々の学生に対しても、その学生がやりたいと思える学習方法を適切に提示することは難しい。これは、英語学習に対するやる気の違いかということ、決してそれだけではない。もちろん英語学習そのものに対するやる気にも左右されるが、英語学習そのものへのやる気がある学生であっても、学生によって好む学習方法は異なっているのが普通である。実際、学生はしばしばどのように英語を勉

強すれば良いのかを尋ねてくるが、そのように自ら勉強方法を探しているような学生の場合でも、全く同じ学習方法に対して、ある学生はやる気を見せ、別の学生は全くやる気を見せないことはよくあることである。

提示された学習方法について、「やりたい」あるいは「やりたくない」と感じるということは、それらの学習方法に含まれる何かが、彼らの「やりたい」という気持ちに働きかけていると考えることができるだろう。つまり、彼らの内に、勧められた学習方法に対して学習意欲を持つかどうかを決定している内的な基準があり、その基準に適ったものを「やりたい」と感じるのではないかと考えられるのである。

学習方法を勧める場合、多くの教師は自分の体験や知識を元にそれらを勧めているのではないかと考えられるが、この学習者の基準がどのようなものであるかをきちんと把握することが可能であれば、学習者に合った適切な学習方法の勧め方が可能になると考えられる。そのため、本研究では、どのような学習者にどのように学習方法を勧めれば彼らの学習意欲を増すことができるのか、つまり学習者の属性と英語学習に対する学習意欲の関係について調査をし、教師が学習者の学習意欲を高めるためにどのような助言をすれば良いかの手がかりを得ることを目的とする。

2. 先行研究の概観

学習方法に関する研究は、主に「学習方略 (learning strategy)」という分野において行われてきた。学習方略とは「外国語学習の際に学習者がとる方法・行動などの中で、ある学習段階において、特定の活動に単独あるいは組み合わせで利用されると、活動の遂行や対象言語の習得が容易になったり、効果的になったり、効率的になったりする可能性を持ったもので、学習者によって意識化できるものをいう」(竹内 2003: 34) と定義でき、主な研究として Oxford (1990) の開発した SILL (Strategy Inventory for Language Learning) を用いた研究などが挙げられる。しかしながら、このような研究の中で取り上げられて

いる学習方略とは、例えば、イメージを利用して記憶する、文の中で意味を推測するなどであり、それらは英語学習の成功者がどのような方法・方略を用いて英語を学習したのかを明らかにしようとする研究である。そのため、具体的な学習方法を検討したものではない。具体的な学習方法を扱った研究としては、英語教育実態調査研究会（1993）、広島大学教育学部英語教育研究室（1997）、竹内（2003）、青木他（2001）などが挙げられる。ただし、英語教育実態調査研究会（1993）による英語授業に対する学習者の意識調査や広島大学教育学部英語教育研究室（1997）による英語学習に対する態度や動機の調査は、アンケート調査の中に数項目、学習方法についての項目を含んでいるにすぎず、学習方法それ自体に焦点を当てて調査しているわけではない。竹内（2003）は、学習方略の観点からの調査に加えて、学習方法に焦点を当て、学習成功者がどのような方法で学習を行い、その学習方法を実践する中でどのような学習方略を用いたのかを調査している。そして、その結果として、学習者がどのような段階で、どのような学習方法を行えば効果的かについての教育的な示唆を提示している。一方、青木他（2001）を始めとする、青木らの一連の研究（青木他 2002a, 2002b；池上他 2002, 2003）は、どのような学習方法が効果的なのかではなく、学習者がどのような学習方法に学習意欲を感じるのかについて研究を行っている。青木らは一連の研究において、「英語で日記をつける」や「洋楽を聴く」といった具体的な学習方法を取り上げ、学習者がどのような学習方法に対して学習意欲を持つのかを調査している。青木他（2001）は、スピーキングやライティングという発表技能に関しては「Eメールの交換」といったコミュニケーション型の学習方法、リーディング、リスニングという受容技能に関しては「洋楽を聴く」などの学習負荷が低いと考えられる学習方法が、学習者に「やりたい」と考えられていることを明らかにしている。また青木他（2002a）では、学習者が好む学習方法は、学習目標や学力の自己評価に影響を受けており、その高低で好む学習方法が異なっていることが示されている。特に、発表技能においては、目標や自己評価の高い学習者は、コミュニケー

ション型の学習方法を好み、単調な学習方法を好まない傾向があるのに対して、逆に、目標、自己評価の低い学習者は単調な学習方法を好み、コミュニケーション型を好まないことが明らかにされている。一方、受容技能においては、目標の高い学習者は役立つと思われる学習方法を、低い学習者は学習負荷が軽く、興味が持てる学習方法をやりたいと考えていることが示されている。このような結果から、青木らは、学習者がある学習方法に対して学習意欲を持つかどうかを決定している判断基準は、(1)その学習方法に他者とのコミュニケーションが含まれているかどうか、(2)学習内容に興味を持てるかどうか、(3)学習負荷が重いか軽いのか、の3点なのではないかと推測している。青木らは続く研究(青木他 2002b, 池上他 2002)において、それらの3要因を操作した場合に、学習者の学習意欲がどのように変化するかを調査している。その結果、学習意欲に大きく影響するのは学習目標であることを明らかにしている。また、例えば、目標が高ければ、英語母語話者とのコミュニケーション型の学習方法をやりたいと思うが、目標が低い場合は、非母語話者のほうがむしろやりたいと思う、というように、目標の高い学習者と低い学習者では変数の影響の仕方が異なっていることを示している。青木らはさらに3要因がどのような情意的要因と関係しているのか、つまり学生にどのように感じさせれば、その学習方法を「やりたい」と思わせることができるのかを調べ、発表技能に関しては「たいへんさ」、受容技能に関しては「楽しさ」と「役立ち度」が学習意欲に関係していること明らかにしている。また、特に学習者にとっては、その学習方法を継続できると感じる事が学習意欲に結びついているのではないかと推測している(池上他 2003)。

本研究は、青木ら同様に、学習者がどのような学習方法に学習意欲を示すのかについて調査しているが、青木らの研究が、主に学習方法に含まれるどのような要因が学習者の学習意欲に働きかけているのかを明らかにしようとした研究であるのに対して、本研究は学習者の英語学習に対する学習動機が、学習方法に対する学習意欲にどのように係わっているのかを調査している。

3. 調査方法

調査は、4年制大学理系学部1年生98名、英語関連ではない文系学部1年生60名を対象に行った。調査方法は、5段階評価の選択方式によるアンケートである。

アンケートの質問項目では、まず、学習者の属性に関する項目を設定した。設定した質問項目は、学生自身の英語学習に対する意識を問う項目と英語力の自己評価の項目である。そして、英語学習に対する意識を問う項目は、学習目標と学習動機に細分化して質問項目を作成した。

学習目標については、即時的・長期的という観点から作成した4つの質問項目によって、英語を学ぶことでどのようなことを実現したいのかを問うことにした(表1)。これらの各質問項目は、それぞれ「(1)全然思わない」から「(5)とても思う」までの5段階評価によって回答されている。

学習動機に関しては、堀野他(1997)、市川(1998)、Maeda(2003)を基に、学習動機を(1)自身の知的な好奇心や向上心を充たすために学習をする「充実志

表1：学習目標に関する質問項目

・英語で自分に必要な情報を集められるようになりたい		
(1) 全然思わない	(2) あまり思わない	(3) どちらでもない
(4) わりと思う	(5) とても思う	
・将来、英語を使った職業につきたい		
(1) 全然思わない	(2) あまり思わない	(3) どちらでもない
(4) わりと思う	(5) とても思う	
・海外旅行などで英語を自由に使えるようになりたい		
(1) 全然思わない	(2) あまり思わない	(3) どちらでもない
(4) わりと思う	(5) とても思う	
・英語圏の大学や語学学校に留学してみたい		
(1) 全然思わない	(2) あまり思わない	(3) どちらでもない
(4) わりと思う	(5) とても思う	

向」, (2)自身の知力の訓練をするための「訓練志向」, (3)実際の生活に役立つ知識を得るためのとしての報酬を求める「報酬志向」, (4)他の学生や先生につられて学習する「関係志向」, (5)学習の結果としての報酬を求める「報酬志向」, (6)他者から褒められたいという「賞賛志向」の6種類に分類し、それぞれについて表2のような質問項目を作成した。そして、各質問項目について「(1)全然そうは思わない」から「(5)とてもそう思う」までの5段階で評価させた。

英語力の自己評価に関しては、スピーキング、リスニング、リーディング、ライティングの4技能からそれぞれ学習者の日常に即した具体的な場面を設定し(表3)、それに対して、例えばスピーキングであれば「(1)全く話せない」から「(5)問題なく話せる」、リスニングであれば「(1)全く聞き取れない」から「(5)問題なく聞き取れる」というように5段階で自己評価をさせた。

次に、学習者の属性に続いて、学習方法に関する質問項目を作成した。学習方法は、4技能のうち学習者に最も身近な学習であると考えられるリーディングと、それと対をなす発表技能のライティングの2技能から選定し、アンケートにはそれぞれ表4のように具体的な学習方法を提示した。また、青木らの研究結果を参考に、学習者のやりたいという気持ちに関係していると考えられる「やる気(どのくらいやりたいと思うか)」「役立ち(どの程度役立つと思うか)」「継続(続けられそうか)」「容易さ(どの程度簡単、あるいは難しそうか)」の4つの評価基準を元に質問項目を作成し、それぞれの学習方法について評価させた。

実施したアンケートは、学習動機と学習意欲の関係を探り、どのような学習者がどのような学習方法をやりたいと思うのか、またどのような要因でやりたいという気持ちを決定しているのかを明らかにするために、学習動機に関する質問項目の回答結果を基に学習者をいくつかのグループに分け、そのグループごとにそれぞれの学習方法をどのように評価し、どのようにやりたいという気持ちを決定しているのかを分析することにした。

表 2 : 学習動機に関する質問項目

<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>わかると楽しいから</u> (充実志向) <ul style="list-style-type: none"> (1) 全然そうは思わない (2) あまりそう思わない (3) どちらでもない (4) わりとそう思う (5) とてもそう思う
<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>頭の訓練になるから</u> (訓練志向) <ul style="list-style-type: none"> (1) 全然そうは思わない (2) あまりそう思わない (3) どちらでもない (4) わりとそう思う (5) とてもそう思う
<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>英語力があれば生活に便利だから</u> (実用志向) <ul style="list-style-type: none"> (1) 全然そうは思わない (2) あまりそう思わない (3) どちらでもない (4) わりとそう思う (5) とてもそう思う
<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>みんなもするし、仕方ないから</u> (関係志向) <ul style="list-style-type: none"> (1) 全然そうは思わない (2) あまりそう思わない (3) どちらでもない (4) わりとそう思う (5) とてもそう思う
<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>TOEIC などの検定試験でよい点数をとったり、良い成績が取りたいから</u> (報酬志向) <ul style="list-style-type: none"> (1) 全然そうは思わない (2) あまりそう思わない (3) どちらでもない (4) わりとそう思う (5) とてもそう思う
<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>英語ができると、すごいと思われるから</u> (賞賛志向) <ul style="list-style-type: none"> (1) 全然そうは思わない (2) あまりそう思わない (3) どちらでもない (4) わりとそう思う (5) とてもそう思う

表 3 : 英語力の自己評価に関する質問項目

<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>突然外国人に道を聞かれても困らない程度の英語が話せる。</u> <ul style="list-style-type: none"> (1) 全く話せない (2) あまり話せない (3) なんとか話せる (4) わりと話せる (5) 問題なく話せる
<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>英語の映画やドラマのセリフを字幕なしで聞き取ることができる。</u> <ul style="list-style-type: none"> (1) 全く聞き取れない (2) あまり聞き取れない (3) なんとか聞き取れる (4) わりと聞き取れる (5) 問題なく聞き取れる
<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>英字新聞の記事を辞書なしで読んでも内容が理解できる。</u> <ul style="list-style-type: none"> (1) 全く理解できない (2) あまり理解できない (3) なんとか理解できる (4) わりと理解できる (5) 問題なく理解できる
<ul style="list-style-type: none"> ・ <u>辞書を使わなくても、英語でお礼の手紙等を書ける。</u> <ul style="list-style-type: none"> (1) 全く書けない (2) あまり書けない (3) なんとか書ける (4) わりと書ける (5) 問題なく書ける

表4：提示された学習方法と質問項目（ライティング・リーディング）

〈ライティング〉

1. 英語で日記をつける。
2. 英語でブログ（ネット上の日記，コメントなどが返ってくる）をつける。
3. 英語圏の人とEメールでやりとりする（ペンパル）。
4. 和文英訳の問題集をやる。
5. テーマを決めて，エッセイなどを書く。

〈リーディング〉

1. 英字新聞を読む。
2. 英語の小説を読む。
3. ネットを使って英語を読む。
4. リーディングの問題集をやる。
5. 日本語訳つきの英語対訳本を読む。

〈質問項目〉

〈やる気〉 (1) 全然やりたくない (2) あまりやりたくない (3) どちらでもない
(4) わりとやりたい (5) とてもやりたい

〈役立ち〉 (1) 全然役立たない (2) あまり役立たない (3) わからない
(4) わりと役立つ (5) とても役立つ

〈継続〉 (1) 全然続きそうにない (2) あまり続きそうにない
(3) どちらでもない (4) わりと続きそう
(5) とても続きそう

〈容易さ〉 (1) とても難しそう (2) 結構難しそう (3) どちらでもない
(4) わりと簡単そう (5) とても簡単そう

4. 調査結果

調査結果は，(1)調査参加者全体の傾向，(2)学習動機グループごとの傾向，の2段階に分けて報告していく。

4.1. 調査参加者全体の傾向

まず調査参加者全体の属性に関する項目からみていきたい。表5は，調査参加者全体の学習目標の平均値と標準偏差である。「情報収集」と「海外旅行」

が高めな一方で、「職業」と「留学」の数値が低いことがわかる。これは、調査の参加者が英語関連の学部所属の学生ではなかったため、職業や留学といった目標は持ちにくかったからではないかと考えられる。

学習動機についての分析結果(表6)を見ると、「実用志向」「充実志向」「関係志向」の順に数値が高く、「賞賛志向」「報酬志向」「訓練志向」の数値が低いことが示されている。つまり、全体としては、「できるようになれば便利(実用志向)」「わかると楽しい(充実志向)」「仕方なく(関係志向)」という動機が学習動機としては主要な要因であると捉えることができる。

英語力の自己評価については、すべての項目において低い数値が示されている(表7)。どの項目も「(1)まったくできない」～「(2)あまりできない」程度の自己評価であるため、全体的には英語力に自信がないと言える。スピーキングの数値が他に比べて若干高いのは、質問項目として設定した「道案内」という状況が、授業などでよく取り上げられる内容であるためではないかと考えられる。

表5：学習目標の平均値と標準偏差

	情報収集	職業	海外旅行	留学	平均
平均値	3.65	2.29	4.02	2.27	3.06
標準偏差	0.96	0.94	0.99	1.24	1.04

表6：学習動機の平均値と標準偏差

	充実志向	訓練志向	実用志向	関係志向	報酬志向	賞賛志向
平均値	3.33	2.65	3.57	3.12	2.73	2.77
標準偏差	1.09	0.98	1.02	1.15	1.21	1.18

表7：英語力自己評価の平均値と標準偏差

	スピーキング	リスニング	リーディング	ライティング	平均
平均値	2.00	1.49	1.54	1.53	3.06
標準偏差	0.84	0.67	0.75	0.74	1.04

表8：各学習方法（リーディング）の記述統計量

		やる気	役立ち	継続	容易さ
英字新聞	<i>M</i>	2.22	3.56	1.92	1.55
	<i>SD</i>	1.07	1.06	0.92	0.61
小説	<i>M</i>	2.40	3.23	1.98	1.49
	<i>SD</i>	1.20	1.08	0.97	0.68
ネット	<i>M</i>	2.46	3.24	2.18	1.87
	<i>SD</i>	1.16	1.02	1.08	0.86
問題集	<i>M</i>	2.00	3.19	1.97	2.10
	<i>SD</i>	0.98	1.13	0.88	0.88
対訳本	<i>M</i>	2.80	3.23	2.63	2.73
	<i>SD</i>	1.08	1.05	1.07	1.09

M = 平均値, *SD* = 標準偏差

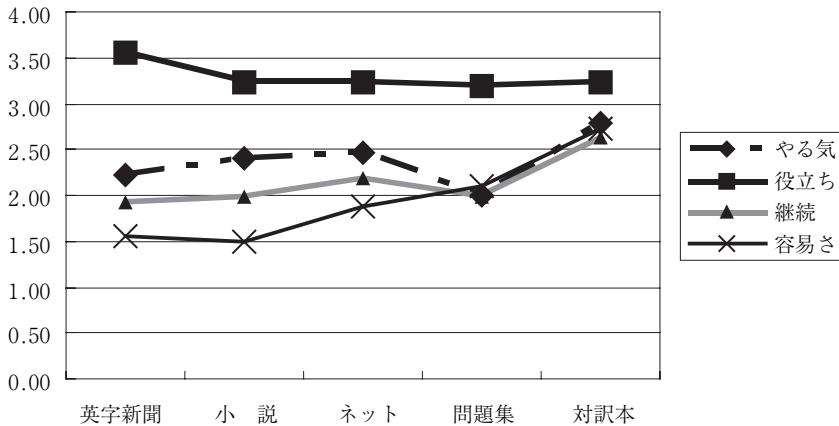


図1：学習方法（リーディング）

次に学習方法の各質問に対する回答結果をみていく。表8と図1は、リーディングの学習方法に対する「やる気」「役立ち」「継続」「容易さ」の4つの質問項目の回答をまとめたものである。すべての学習方法について、「やる気」の数値は“3（どちらでもない・わからない）”を下回っており、残念ながらどの学習方法も全体的にみるとあまりやりたいとは考えられていないという結果

が示されているが、そのなかで「やる気」に関する数値が一番高いのが「対訳本」であった。「対訳本」は、「継続」「容易さ」で他よりも高い数値を示しており、続けられそうと感じられたことがやる気の数値を上げた要因なのではないかと考えられる。次に「役立ち」をみると、最も役立つと考えられているのは「英字新聞」であるが、同時に「容易さ」「継続」が低く、役立つが難しく続けられないという評価がされているようである。「問題集」については、「容易さ」は「対訳本」について高い数値であるにもかかわらず、「継続」では低い数値を示しており、「やる気」の数値も最も低い。そのため、「問題集」については、わりと簡単そうだが、続けられないだろうからやりたくはない、というような評価を受けているのではないかと推測される。

表9、図2は、リーディング同様に、ライティングの学習方法に対する回答をまとめたものである。最も「やる気」の数値が高い学習方法は「Eメール」であった。他の学習方法が「容易さ」と似た傾向を示しているのに対して、「Eメール」のみが別の傾向を示している。「Eメール」は「役立ち」「継続」の数値が高く、かつ「容易さ」が低い。すなわち、難しそうだが、役立ちし、続けられそうだと考えられている。そのため、やりたいと思わせる度合いが他の学習方法よりも高かったのではないかと考えられる。「役立ち」の観点から見れば、「英文日記」は「Eメール」に近い数値を示しており、また「容易さ」の数値は他の学習方法に比べてやや高く、他の学習方法よりも容易だと考えられているにもかかわらず、「やる気」については低い数値を示している。これは「継続」の数値が低く、続けられそうにないと思われていることに要因があるように思われる。「やる気」の数値が最も低い「エッセイ」は、「容易さ」の数値が低く、「役立ち」や「継続」の数値も低い。つまり、あまり役に立たないし、難しいので続けられないからやりたくない、と考えられていると推測できる。

調査参加者全体の傾向では、リーディングでは「対訳本」が、ライティングでは「Eメール」が他の学習方法にくらべて「やる気」の数値が高いことがわ

表9：各学習方法（ライティング）の記述統計量

		やる気	役立ち	継続	容易さ
英文日記	<i>M</i>	2.04	3.37	1.80	2.01
	<i>SD</i>	0.93	1.02	0.90	0.94
ブログ	<i>M</i>	1.89	3.02	1.76	1.70
	<i>SD</i>	0.96	1.13	0.89	0.81
Eメール	<i>M</i>	2.45	3.63	2.14	1.63
	<i>SD</i>	1.21	1.06	1.10	0.73
問題集	<i>M</i>	2.09	3.14	1.97	2.05
	<i>SD</i>	0.98	1.04	0.94	0.83
エッセイ	<i>M</i>	1.72	2.93	1.60	1.50
	<i>SD</i>	0.86	1.12	0.75	0.69

M = 平均値, *SD* = 標準偏差

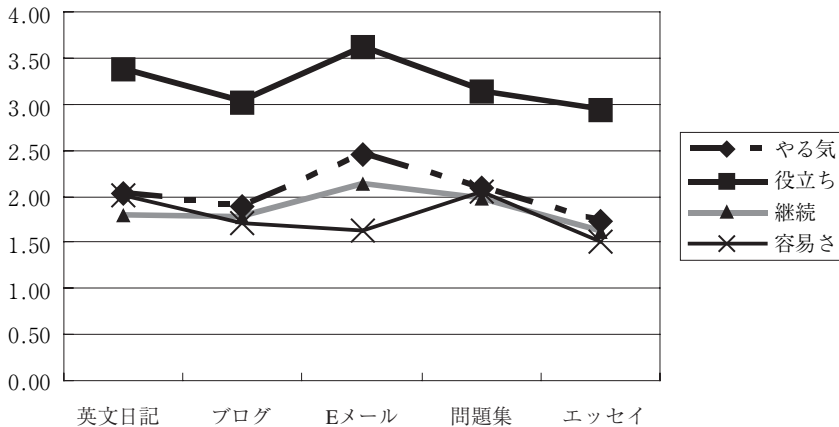


図2：学習方法（ライティング）

かった。また、「やる気」と「継続」の数値の変化が似ていることから、続けられると思えることがやりたいという気持ちになる要因の一つなのではないかと仮定できるだろう。

次項では、学習動機をグループ分けし、学習動機の似た傾向を持ったグループごとに、どのような学習方法が好まれるのか、その要因も含めて検討していく。

4.2. 学習動機グループごとの傾向

まず、調査参加者全員を学習動機を元にグループ化することにした。グループ化をするにあたっては、学習動機として設定した6項目（「充実志向」、「訓練志向」、「実用志向」、「関係志向」、「報酬志向」、「賞賛志向」）の得点を用いて、平方ユークリッド距離を用いたウォード法によるクラスタ分析を行い、学習者の類型化を試みた。ウォード法を用いた理由は、この方法によるクラスタ分析が比較的まとまったクラスタを得られやすく、回答者の特徴を明らかにすることを目的とした分析には有用であると考えられたためである。分析では、デンドログラムおよび分散分析の結果を検討し特徴的なグループが得られるよう探索した結果、4つのクラスタを得られた。それぞれのクラスタに含まれる人数は、第1クラスタが54名、第2クラスタが46名、第3クラスタが32名、第4クラスタが24名であった。これらの人数について χ^2 検定を行ったところ、有意な人数の偏りが見られた（ $\chi^2=15.468$, $df=3$, $p<0.01$ ）。表10は得られたクラスタ別の学習動機6項目の記述統計量をまとめた表であり、図3はクラスタごとの学習動機の平均値を图示したものである。

また、得られたクラスタを独立変数、学習動機に関する6項目を従属変数として、グループ間における平均値の差を分散分析によって検討した。その結果、「充実志向」は $F(3, 154) = 27.783$, $p < .001$ 、「訓練志向」は $F(3, 154)$

表10：クラスタごとの学習動機6項目の記述統計量

		充実志向	訓練志向	実用志向	関係志向	報酬志向	賞賛志向
第1クラスタ (n=54)	<i>M</i>	2.95	2.73	3.30	3.64	2.95	3.29
	<i>SD</i>	0.88	0.77	0.89	0.84	1.03	0.91
第2クラスタ (n=46)	<i>M</i>	3.91	2.72	3.91	2.63	2.07	2.13
	<i>SD</i>	0.78	1.03	0.81	1.12	0.71	0.81
第3クラスタ (n=32)	<i>M</i>	3.97	3.06	4.34	2.28	4.16	3.75
	<i>SD</i>	0.97	1.01	0.65	1.02	0.72	1.05
第4クラスタ (n=24)	<i>M</i>	2.25	1.79	2.50	3.96	1.63	1.50
	<i>SD</i>	0.94	0.83	0.98	0.75	0.77	0.59

M = 平均値, *SD* = 標準偏差

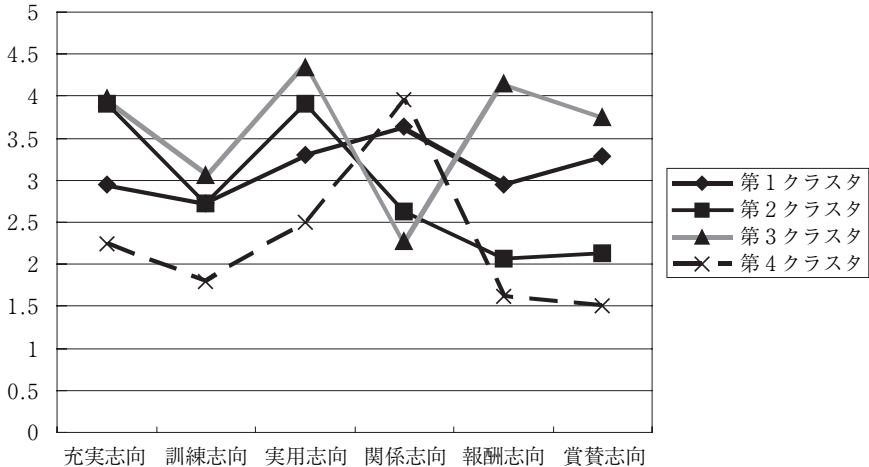


図3：クラスタごとの学習動機6項目の平均値

=9.499, $p < .001$, 「実用志向」は $F(3, 154) = 26.455$, $p < .001$, 「関係志向」は $F(3, 154) = 23.924$, $p < .001$, 「報酬志向」は $F(3, 154) = 54.032$, $p < .001$, 「賞賛志向」は $F(3, 154) = 45.395$, $p < .001$ であり、いずれの変数についてもグループ間で有意な差がみられた。また、TukeyのHSD法による多重比較の結果、「充実志向」では $1 > 4$, $2 > 1 \cdot 4$, $3 > 1 \cdot 4$, 「訓練志向」では $1 > 4$, $2 > 4$, $3 > 4$, 「実用志向」では $1 > 4$, $2 > 1 \cdot 4$, $3 > 1 \cdot 4$, 「関係志向」では $1 > 2 \cdot 3$, $4 > 2 \cdot 3$, 「報酬志向」では $1 > 2 \cdot 4$, $3 > 1 \cdot 2 \cdot 4$, 「賞賛志向」では $1 > 2 \cdot 4$, $2 > 4$, $3 > 2 \cdot 4$, それぞれの間に5%水準で有意な差がみられた。

これらの結果から、各クラスタの特徴をまとめた。第1クラスタは、関係志向がやや高いものの全体的にどの学習動機についても「どちらでもない」と考えている傾向があり、明確な動機もなく「なんとなく」学習をしていると考えられるため、「なんとなく群」と名付けた。また第2クラスタは、充実志向と実用志向が高い数値を示していることから、英語ができれば楽しいし、便利だと考えている傾向があると考え「便利群」とした。第3クラスタは、充実志向、

実用志向、報酬志向、賞賛志向が高い数値を示しており、全体的に動機付けが高いと考えられるため、「自己向上群」と名づけた。第4クラスは、関係志向のみが非常に高く、仕方なく学習をしていると考えられたため、「仕方なし群」とした(表11)。

表11：各クラスタの名称

第1クラスタ	=	なんとなく群
第2クラスタ	=	便利群
第3クラスタ	=	自己向上群
第4クラスタ	=	仕方なし群

次に、各クラスタの特徴を見ていく。表12、13はクラスタごとの学習目標、英語力の自己評価の記述統計量である。まず、学習目標に関する表12、

表12：学習動機クラスタ別の学習目標の記述統計量

		情報収集	職業	海外旅行	留学	平均
なんとなく群	<i>M</i>	3.50	2.14	3.70	2.13	2.87
	<i>SD</i>	0.89	0.77	1.01	1.08	0.94
便利群	<i>M</i>	3.91	2.50	4.41	2.41	3.31
	<i>SD</i>	1.01	0.96	0.69	1.33	0.99
自己向上群	<i>M</i>	4.03	2.84	4.56	2.81	3.56
	<i>SD</i>	0.65	0.88	0.72	1.35	0.90
仕方なし群	<i>M</i>	3.00	1.50	3.29	1.58	2.34
	<i>SD</i>	1.02	0.72	1.08	0.93	0.94

M = 平均値, *SD* = 標準偏差

表13：学習動機クラスタ別の英語力自己評価の記述統計量

		スピーキング	リスニング	リーディング	ライティング	平均
なんとなく群	<i>M</i>	1.95	1.48	1.45	1.52	1.60
	<i>SD</i>	0.70	0.71	0.66	0.60	0.67
便利群	<i>M</i>	2.15	1.59	1.72	1.54	1.75
	<i>SD</i>	0.97	0.78	0.86	0.91	0.88
自己向上群	<i>M</i>	2.25	1.59	1.78	1.78	1.85
	<i>SD</i>	0.76	0.56	0.79	0.75	0.72
仕方なし群	<i>M</i>	1.50	1.21	1.08	1.21	1.25
	<i>SD</i>	0.78	0.41	0.28	0.51	0.50

M = 平均値, *SD* = 標準偏差

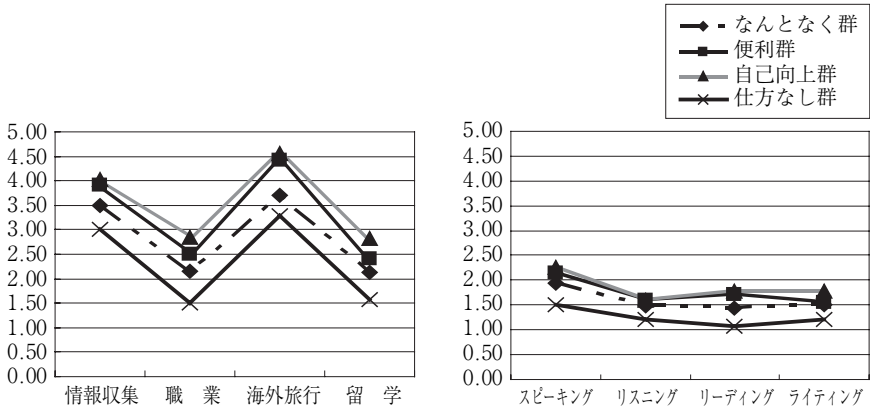


図4：学習動機クラス別の学習目標と英語力自己評価

図4を見ると、どのグループにおいても、全体の結果同様に、「情報収集（英語で自分に必要な情報を集められるようになりたい）」と「海外旅行（海外旅行などで英語を自由に使えるようになりたい）」が高めで、「職業（将来、英語を使った職業につきたい）」と「留学（英語圏の大学や語学学校に留学してみたい）」の数値が低いことが示された。やはり、学習動機に拘らず英語を専門的に学ぶ学生ではないため、英語を使った職業や英語圏への留学といった目標は持ちにくいことが示されていると言えるだろう。

グループごとに比較してみると、すべての項目で「自己向上群」「便利群」「なんとなく群」「仕方なし群」の順番に数値が高いことがわかる。特に「仕方なし群」はすべての項目で数値が低く、英語学習の動機同様に、英語学習に対する目標もあまり持っていないことが示された。

次に、英語力の自己評価についてであるが、これについても全体の結果同様、全体的にすべてのグループの数値が低いことが示された。これは、既述の通り調査参加者が英語関係学部の学生ではないので、英語を使うことに対しての自信がないためだと思われる。

では、それぞれの学習方法に対する学習意欲について、クラス別にみていきたい。表 14 と図 5 は、学習動機クラス別の「やる気」に関する分析結果である。どの学習方法についても、「自己向上群」「便利群」「なんとなく群」「仕方なし群」の順に「やる気」の数値が高い。特に、「英字新聞」「小説」「ネット」については、「自己向上群」と「便利群」、「なんとなく群」、「仕方なし群」

表 14：学習動機クラス別の「やる気」(リーディング)

		英字新聞	小 説	ネット	問題集	対訳本
なんとなく群	<i>M</i>	2.07	2.29	2.32	1.89	2.68
	<i>SD</i>	1.04	1.07	1.06	0.95	0.96
便利群	<i>M</i>	2.59	2.65	2.74	1.96	2.80
	<i>SD</i>	1.09	1.27	1.16	0.87	1.09
自己向上群	<i>M</i>	2.50	2.84	3.00	2.69	3.53
	<i>SD</i>	1.02	1.19	1.11	1.09	0.98
仕方なし群	<i>M</i>	1.46	1.58	1.50	1.42	2.08
	<i>SD</i>	0.66	0.97	0.78	0.58	0.93

M = 平均値, *SD* = 標準偏差

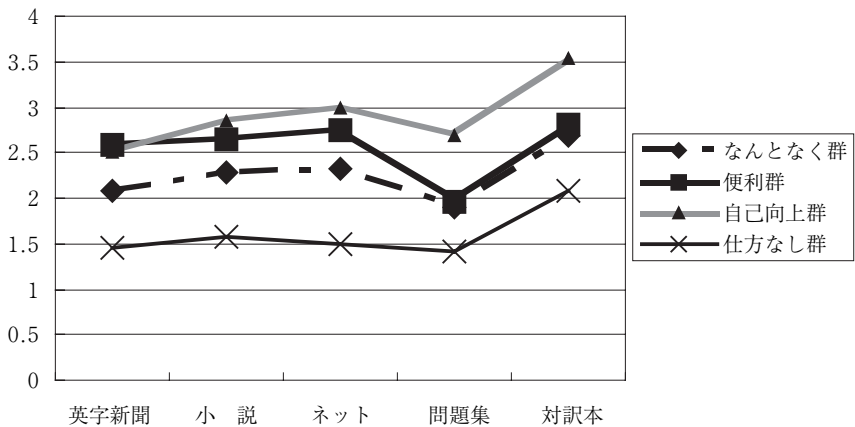


図 5：学習動機クラス別の「やる気」(リーディング)

の間の差が大きく、「問題集」と「対訳本」については、「自己向上群」、「便利群」および「なんとなく群」、「仕方なし群」の間に差があることが示されている。つまり、「自己向上群」はいつでも他の群と比べて「やる気」の数値が高く、「仕方なし群」はいつでも低いが、「便利群」と「なんとなく群」の差は、「英字新聞」「小説」「ネット」の場合に示されている。この理由については、「なんとなく群」が難しそうな学習方法を好まなかったからではないかと考えられる。

では、次に動機クラスター別にそれぞれの学習方法においてどのような傾向を示したのかをみていきたい。

表15、図6は、「なんとなく群」のリーディングの学習方法における4つの評価項目の回答をまとめたものである。基本的には、全体の結果に非常に近い結果であると言える。少し詳しくみていくと、「英字新聞」がもっとも役立つと思われる反面、非常に難しく、続けられそうにないと考えられており、「やる気」の数値は低い。逆に、「対訳本」は、最も役立つと思われているにも拘わらず、それほど難しくなく、続けやすいと感じられており、「やる気」の数値が高い。特徴的なのは「問題集」であり、「役立ち」度は他と同程度と評価されており、「英字新聞」や「小説」などに比べて容易だとも思われ

表15:「なんとなく群」の平均値と標準偏差(リーディング)

		英字新聞	小説	ネット	問題集	対訳本
やる気	<i>M</i>	2.07	2.29	2.32	1.89	2.68
	<i>SD</i>	1.04	1.07	1.06	0.95	0.96
役立ち	<i>M</i>	3.52	3.14	3.05	3.16	3.02
	<i>SD</i>	1.04	1.03	0.92	1.04	1.02
継続	<i>M</i>	1.95	1.98	2.18	2.00	2.55
	<i>SD</i>	0.96	0.96	0.99	0.91	1.08
容易さ	<i>M</i>	1.57	1.48	1.91	2.09	2.70
	<i>SD</i>	0.63	0.57	0.86	0.84	1.09

M = 平均値, *SD* = 標準偏差

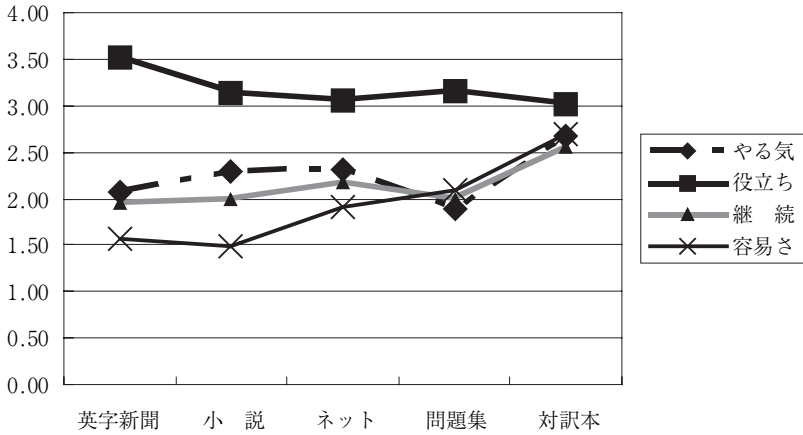


図6：「なんとなく群」(リーディング)

ているが、「継続」の数値は低く、「やる気」については最も低い数値となっている。「小説」については、「英字新聞」よりも「役立ち」度は低く、「継続」や「容易さ」はほぼ同じであるが、「やる気」はわずかに高い。これは新聞よりは小説の方が、学習者が興味を持って取り組めると判断されているからではないかと推測できる。

表 16：「なんとなく群」の要素間の相互相関 (リーディング)

	やる気	役立ち	継続	容易さ	目標	英語力
やる気	—	.321**	.643**	.459**	-.038	.079
役立ち		—	.285**	.101	-.138*	.079
継続			—	.643**	.021	.117
容易さ				—	-.060	.180**
目標					—	-.075
英語力						—

* $p < .05$, ** $p < .01$

目標：目標4項目の平均値，英語力：英語力（リーディング）

表 17:「なんとなく群」の重回帰分析結果
(リーディング)

	なんとなく群	
	β	
目 標	—	
英語力	—	
役立ち	.150**	
継 続	.600***	
容易さ	—	
R^2	.434***	

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$ β : 標準偏回帰係数

について検討した。分析にあたっては、ステップワイズ法を用いて変数選択を行った。表 17 にその結果を示す。分析の結果、当てはまり度の指標となる決定係数 (R^2) は中程度の数値が得られ、「継続」「役立ち」から「やる気」に対する標準偏回帰係数が有意であった。つまり、「なんとなく群」のリーディングの学習方法に対するやりたいという気持ちは、続けられるかどうかが大きく影響しており、それに加えて役立つかどうかを考慮に入れられていると考えることができる。

表 16 は、リーディングの学習方法についての各質問項目間の相互相関を示した表である。「やる気」と「役立ち」「容易さ」の間に中程度の正の相関、「やる気」と「継続」、「継続」と「容易さ」の間に比較的高い正の相関がみられた。

次に、重回帰分析によって、「役立ち」「継続」「容易さ」「目標」「英語力」の「やる気」に与える影響に

表 18:「便利群」の平均値と標準偏差 (リーディング)

		英字新聞	小 説	ネット	問題集	対訳本
やる気	<i>M</i>	2.59	2.65	2.74	1.96	2.80
	<i>SD</i>	1.09	1.27	1.16	0.87	1.09
役立ち	<i>M</i>	3.67	3.50	3.43	3.22	3.43
	<i>SD</i>	1.03	0.96	0.96	1.17	1.07
継 続	<i>M</i>	2.04	2.04	2.37	1.89	2.54
	<i>SD</i>	0.84	0.92	1.10	0.74	1.03
容易さ	<i>M</i>	1.63	1.46	1.91	2.15	2.65
	<i>SD</i>	0.64	0.69	0.91	0.84	1.08

 M = 平均値, SD = 標準偏差

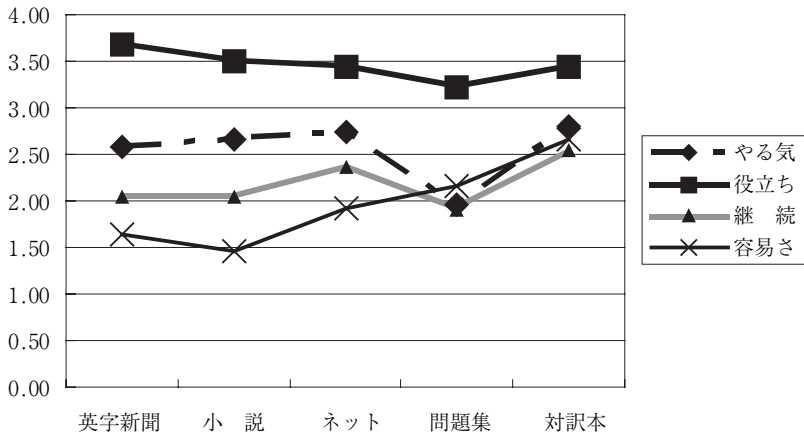


図7: 「便利群」(リーディング)

表18, 図7は「便利群」のリーディング学習方法に関する回答をまとめたものである。「便利群」についても、「なんとなく群」とほぼ同じような回答状況であることがわかる。異なっている点は、「問題集」と「対訳本」の「役立ち」を示す数値の差で、「問題集」が最も「役立ち」度が低いと考えられていることがわかる。また、「小説」のほうが「英字新聞」よりも難しいと感じて

表19: 「便利群」の要素間の相互相関(リーディング)

	やる気	役立ち	継続	容易さ	目標	英語力
やる気	—	.443**	.734**	.347**	.147*	.175*
役立ち		—	.387**	.196**	.072	-.027
継続			—	.517**	.106	.160*
容易さ				—	.187**	.207**
目標					—	.329**
英語力						—

* $p < .05$, ** $p < .01$

目標: 目標4項目の平均値, 英語力: 英語力(リーディング)

表 20:「便利群」の重回帰分析結果
(リーディング)

	便利群
	β
目 標	—
英語力	—
役立ち	.187***
継 続	.662***
容易さ	—
R^2	.568***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$ β : 標準偏回帰係数

いることも示されている。

表 19 に示されている要素間の相互相関の結果をみると、「やる気」と「継続」の間に高い正の相関がみられる。また「やる気」と「役立ち」の間、「継続」と「容易」の間にも中程度の正の相関が示されている。表 20 の重回帰分析の結果をみると、比較的高い決定係数 (R^2) が得られており、「継続」が「やる気」

に大きな影響を与え、「役立ち」がやや影響を与えていることがわかる。つまり、「便利群」においても、「なんとなく群」同様に、続けられるかどうかや学習方法をやりたいと思うかどうかに大きな影響を及ぼしていることがわかった。

表 21, 図 8 は「自己向上群」の分析結果である。特徴的なのは「小説」の「役立ち」の数値が低いことである。この群は、学習動機として「報酬志向」、つまり検定や成績で良い結果を得たいという動機付けが高い。そのため、小説

表 21:「自己向上群」の平均値と標準偏差 (リーディング)

		英字新聞	小 説	ネット	問題集	対訳本
やる気	<i>M</i>	2.50	2.84	3.00	2.69	3.53
	<i>SD</i>	1.02	1.19	1.11	1.09	0.98
役立ち	<i>M</i>	3.88	3.34	3.69	3.56	3.59
	<i>SD</i>	0.75	0.87	0.74	1.01	0.91
継 続	<i>M</i>	2.16	2.31	2.38	2.31	3.19
	<i>SD</i>	1.05	1.09	1.07	0.97	1.00
容易さ	<i>M</i>	1.59	1.81	2.09	2.41	3.31
	<i>SD</i>	0.61	0.90	0.86	0.87	0.97

M = 平均値, *SD* = 標準偏差

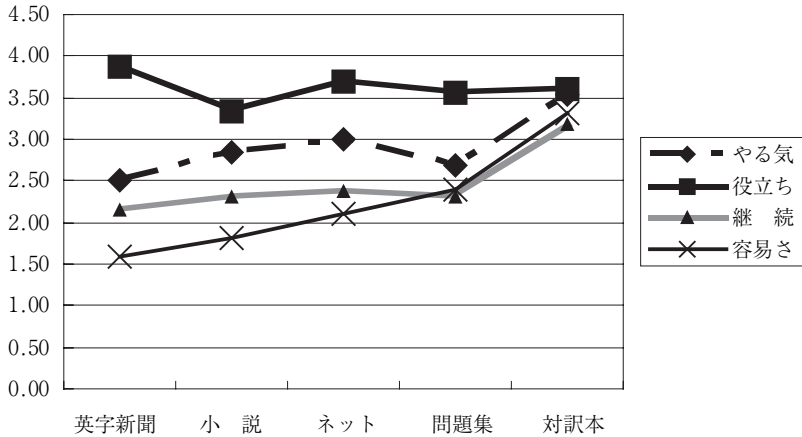


図8: 「自己向上群」(リーディング)

に対しての役立ち度が若干下がっているのではないかと考えられる。また「容易さ」「役立ち」については差が示されている「英字新聞」と「問題集」の「やる気」の数値が同程度であることから、別々の要因によって「やる気」が判断されているのではないかと考えられる。

表22は、各要素間の相互相関である。これまでの2群同様に、「やる気」と

表22: 「自己向上群」の要素間の相互相関(リーディング)

	やる気	役立ち	継続	容易さ	目標	英語力
やる気	—	.429**	.719**	.393**	.327**	.206**
役立ち		—	.208**	.036	.153	.011
継続			—	.536**	.130	.214**
容易さ				—	.010	.153
目標					—	.351**
英語力						—

* $p < .05$, ** $p < .01$

目標: 目標4項目の平均値, 英語力: 英語力(リーディング)

表 23: 「自己向上群」の重回帰分析結果 (リーディング)

自己向上群	
	β
目標	.211***
英語力	—
役立ち	.220***
継続	.629***
容易さ	—
R^2	.616***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$ β : 標準偏回帰係数

「役立ち」, 「継続」と「容易さ」の間に中程度, 「やる気」と「継続」の間に高い正の相関が見られる。特徴的なのは, これまでの2群よりの「役立ち」と「やる気」の相関が高いことである。これは, 「自己向上群」の動機付けが高いことから, より役立つと感じられる学習方法にやりたいという気持ちが向けられているのだと考えられる。表 23 の重

重回帰分析の結果を見ても, これまでの2群よりも「役立ち」の影響が高い。また, これまでの2群と異なって, 「目標」から「やる気」への影響も見られる。決定係数の値も比較的高いため, 「自己向上群」は, 続けられるかどうかに加えて, 役立つかどうか重要であり, また目標が高いほど学習方法に対するやる気が高いことがわかった。

表 24 と図 9 を見ると, 「仕方なし群」は「やる気」「継続」「容易さ」については, 「対訳本」以外ほぼ同じような数値を示しており, 「対訳本」だけが際

表 24: 「仕方なし群」の平均値と標準偏差 (リーディング)

		英字新聞	小説	ネット	問題集	対訳本
やる気	<i>M</i>	1.46	1.58	1.50	1.42	2.08
	<i>SD</i>	0.66	0.97	0.78	0.58	0.93
役立ち	<i>M</i>	3.00	2.75	2.71	2.71	2.88
	<i>SD</i>	1.29	1.45	1.33	1.27	1.08
継続	<i>M</i>	1.29	1.42	1.58	1.63	2.25
	<i>SD</i>	0.46	0.72	1.06	0.82	0.99
容易さ	<i>M</i>	1.29	1.17	1.42	1.63	2.21
	<i>SD</i>	0.46	0.38	0.65	0.88	0.93

M = 平均値, *SD* = 標準偏差

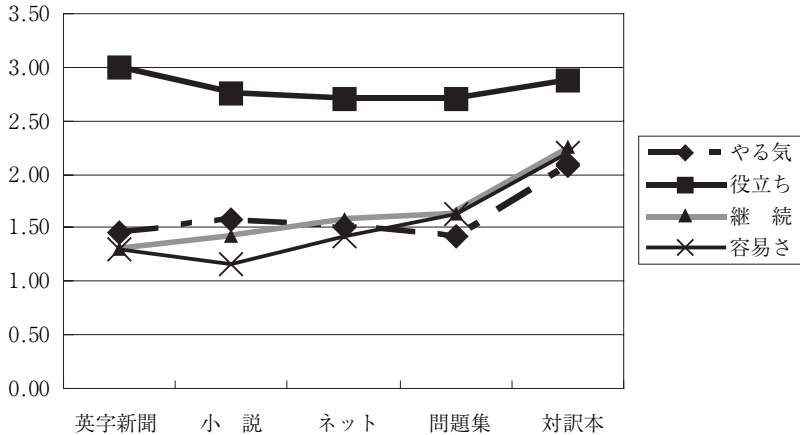


図9：「仕方なし群」(リーディング)

表25：「仕方なし群」の要素間の相互相関(リーディング)

	やる気	役立ち	継続	容易さ	目標	英語力
やる気	—	.425**	.664**	.519**	.306**	.270**
役立ち		—	.346**	.293**	.237**	.029
継続			—	.692**	.291**	.305**
容易さ				—	.157	.145
目標					—	.221*
英語力						—

* $p < .05$, ** $p < .01$

目標：目標4項目の平均値，英語力：英語力(リーディング)

だつて異なった数値を示している。表25の要素間の相互相関をみると、「やる気」と「役立ち」、「やる気」と「容易さ」に中程度の正の相関、「やる気」と「継続」、「継続」と「容易さ」の間に比較的高い正の相関が見られる。表26の重回帰分析の結果をみると、「継続」の影響が他の群と比べて比較的低いと同時に「役立ち」が比較的高い。これらの結果については解釈が難しいが、「継

表 26 : 「仕方なし群」の重回帰分析結果
(リーディング)

仕方なし群	
	β
目 標	—
英語力	—
役立ち	.222**
継 続	.587***
容易さ	—
R^2	.484***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$ β : 標準偏回帰係数

続」と「容易さ」の相関が高いことやそもそも「やる気」の数値が全体的に低いことを考慮に入れると、「仕方なし群」は、なるべく簡単に続けられる学習方法で、少しでも役立つものをやりたいと考えているのではないかと推測される。

続いて、ライティングの学習方法についても、リーディング同様にみていく。表 27 と図 10 は、ライテ

ィングの学習方法についての「やる気」の回答を学習動機クラスター別に集計した結果である。ここでもリーディングと同じようにどの学習方法についても「自己向上群」「便利群」「なんとなく群」「仕方なし群」の順に「やる気」が高いことが示されている。特徴的なのは、「Eメール」についての「便利群」と「なんとなく群」の違いである。その他の学習方法については、ほぼ同じ評価であるが、「Eメール」については、「便利群」のやる気が高い。「便利群」は学習動機として、「実用志向（英語力があれば生活に便利だから）」が高いため、ど

表 27 : 学習動機クラスター別の「やる気」(ライティング)

		英文日記	ブログ	Eメール	問題集	エッセイ
なんとなく群	<i>M</i>	2.11	1.96	2.29	2.04	1.77
	<i>SD</i>	0.97	0.95	1.09	0.89	0.83
便利群	<i>M</i>	2.00	1.93	2.67	2.02	1.72
	<i>SD</i>	0.89	1.00	1.19	0.91	0.93
自己向上群	<i>M</i>	2.28	2.16	2.94	2.75	1.88
	<i>SD</i>	0.89	1.05	1.32	1.08	0.87
仕方なし群	<i>M</i>	1.63	1.25	1.75	1.50	1.42
	<i>SD</i>	0.88	0.44	0.99	0.72	0.72

M = 平均値, *SD* = 標準偏差

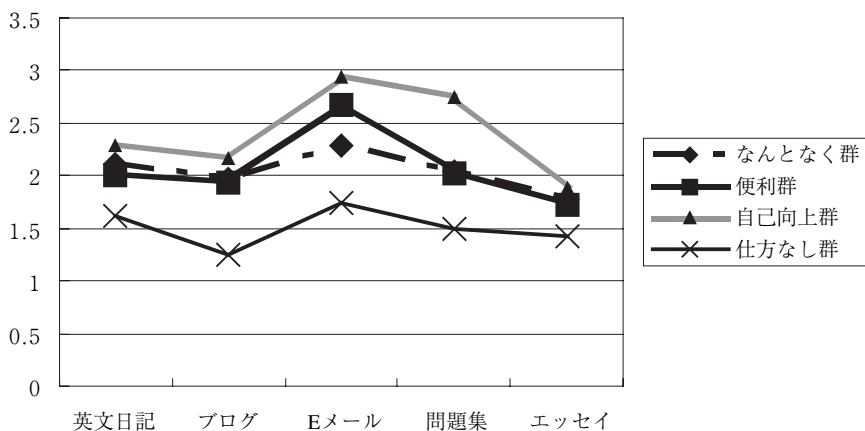


図 10：学習動機クラスタ別の「やる気」(ライティング)

ちらかといえば実用的であると思われる「Eメール」にやや高めの数値を付けたのではないかと考えられる。また、「自己向上群」の「問題集」の数値が「Eメール」に並んで高いが、これはライティングについては、まだ和文英訳のような基礎的な問題集をしなくてはいけないと考えているからではないかと推測できる。

表 28：「なんとなく群」の平均値と標準偏差 (ライティング)

		英文日記	ブログ	Eメール	問題集	エッセイ
やる気	M	2.11	1.96	2.29	2.04	1.77
	SD	0.97	0.95	1.09	0.89	0.83
役立ち	M	3.25	2.98	3.48	3.02	2.95
	SD	0.98	1.04	1.06	0.98	1.09
継続	M	1.95	1.86	2.20	1.95	1.64
	SD	0.88	0.88	1.13	0.92	0.75
容易さ	M	2.11	1.77	1.64	2.13	1.48
	SD	0.87	0.79	0.77	0.92	0.63

M = 平均値, SD = 標準偏差

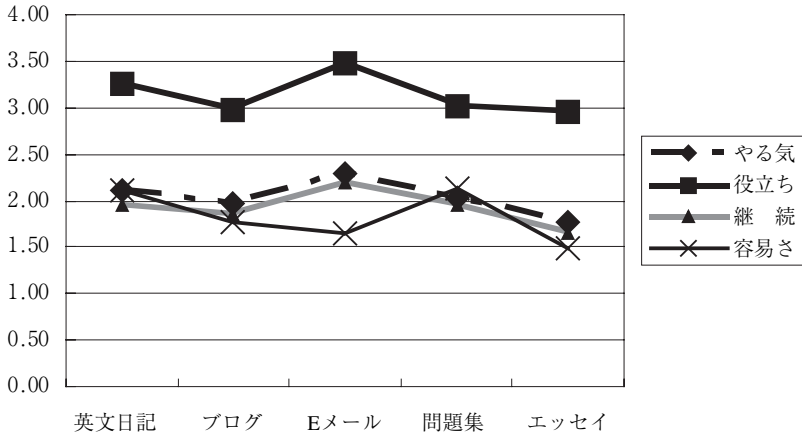


図 11: 「なんとなく群」 (ライティング)

表 29: 「なんとなく群」の要素間の相互相関 (ライティング)

	やる気	役立ち	継続	容易さ	目標	英語力
やる気	—	.293**	.675**	.450**	.339**	.233**
役立ち		—	.225**	.130*	.171**	.197**
継続			—	.469**	.199**	.192**
容易さ				—	.118*	.204**
目標					—	.124*
英語力						—

* $p < .05$, ** $p < .01$

目標: 目標4項目の平均値, 英語力: 英語力 (ライティング)

それでは、動機クラス別にライティングの学習方法についての回答をみていきたい。まず、「なんとなく群」の分析結果をみていく。表28と図11を見ると、「なんとなく群」の特徴は、「継続」と「やる気」の動きがほぼ同じであることであることがわかる。また「Eメール」が、難しいけれども続けやすいと考えられていることが示されている。これは、相手がいる学習方法であるた

表 30: 「なんとなく群」の重回帰分析結果
(ライティング)

	なんとなく群	
	β	
目 標	.193***	
英語力	—	
役立ち	.119**	
継 続	.535***	
容易さ	.161***	
R^2	.534***	

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$ β : 標準偏回帰係数

め、自分だけで行う学習方法に比べて、継続しやすいと感じられ、そのために「やる気」も他に比べて高いのではないかと考えられる。表 29 の要素間の相互相関をみると「やる気」と「継続」に比較的高い正の相関、「やる気」と「容易さ」、「継続」と「容易さ」の間に中程度の正の相関がみられる。また、表 30 の重回帰分析の

結果からは、「やる気」に対して、「継続」「目標」「容易さ」「役立ち」が影響を与えており、続けられること以外にも複合的な要因がやりたいという気持ちに影響を与えていることが示されている。

表 31, 図 12 は、「便利群」の分析結果である。すでに学習動機クラス別に「やる気」を比較した際に述べたが、「便利群」の特徴は「Eメール」のやる気の値が他と大きく異なり、高いことである。「Eメール」を中心にしてみると、結構難しいが、役立ち度や高く、ほかに比べて続けられそうだと考

表 31: 「便利群」の平均値と標準偏差 (ライティング)

		英文日記	ブログ	Eメール	問題集	エッセイ
やる気	<i>M</i>	2.00	1.93	2.67	2.02	1.72
	<i>SD</i>	0.89	1.00	1.19	0.91	0.93
役立ち	<i>M</i>	3.41	3.11	3.80	3.26	2.93
	<i>SD</i>	1.09	1.23	0.86	1.00	1.10
継 続	<i>M</i>	1.72	1.70	2.20	2.07	1.67
	<i>SD</i>	0.89	0.79	0.96	0.93	0.79
容易さ	<i>M</i>	2.04	1.76	1.65	2.09	1.57
	<i>SD</i>	1.07	0.85	0.67	0.72	0.75

M = 平均値, *SD* = 標準偏差

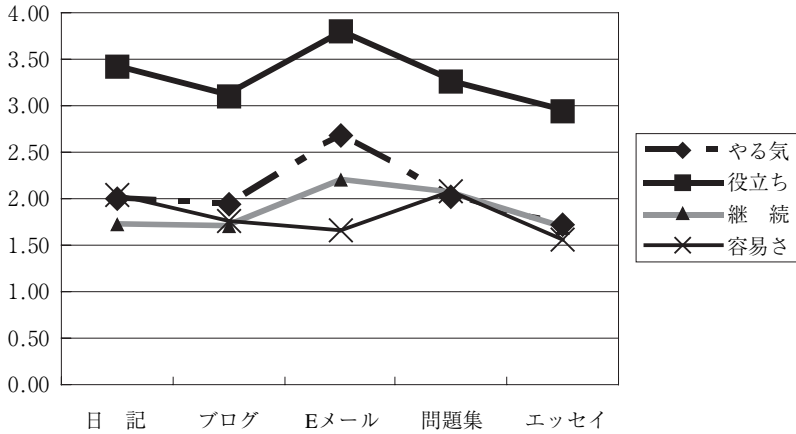


図 12: 「便利群」 (ライティング)

表 32: 「便利群」の要素間の相互相関 (ライティング)

	やる気	役立ち	継続	容易さ	目標	英語力
やる気	—	.432**	.682**	.394**	.179**	.043
役立ち		—	.349**	.163*	.106	-.163*
継続			—	.461**	.129	.056
容易さ				—	.112	.173**
目標					—	.041
英語力						—

* $p < .05$, ** $p < .01$

目標: 目標4項目の平均値, 英語力: 英語力 (ライティング)

えられていることが分かる。継続性だけに注目すると「問題集」も同程度の続けやすさがあると考えられるし、容易さでは、「Eメール」よりも「問題集」のほうが容易だと思われることが示されているが、やる気の差は大きく異なっている。これは「役立ち」度以外にも、数値には表れていないが、興味感心が高いことなどが加味されているのではないかと考えられる。

表 33：「便利群」の重回帰分析結果
(ライティング)

	なんとなく群	
	β	
目標	—	
英語力	—	
役立ち	.221***	
継続	.605***	
容易さ	—	
R^2	.508***	

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$ β ：標準偏回帰係数

表 32 の相関係数を見てみると、「やる気」と「継続」に比較的高い正の相関、「やる気」と「役立ち」、「継続」と「容易さ」間に中程度の正の相関が示されている。表 33 の重回帰分析の結果を見ても、この群に対しては、学習方法を、役立つということを示しながら継続的に実行できるように勧めることが、やりたい気持ちを持たせるために必要である

と言える。

表 34 と図 13 の「自己向上群」の分析結果を見ると、「Eメール」と「問題集」の「やる気」が他よりも高いことが示されている。「Eメール」に関しては、他の群も同様であるが、「自己向上群」の特徴は「問題集」のやる気の高さにある。「英文日記」と比較してみると、「英文日記」は「問題集」と同程度に役立ち、同程度に難しいと考えられており、さらに続けやすさについても、やや「問題集」よりも続けにくいと思われる程度であるが、「やる気」については、大きな差があることが示されている。

表 34：「自己向上群」の平均値と標準偏差（ライティング）

		英文日記	ブログ	Eメール	問題集	エッセイ
やる気	<i>M</i>	2.28	2.16	2.94	2.75	1.88
	<i>SD</i>	0.89	1.05	1.32	1.08	0.87
役立ち	<i>M</i>	3.75	3.16	3.97	3.56	3.22
	<i>SD</i>	0.76	1.02	0.90	0.84	1.01
継続	<i>M</i>	2.06	2.00	2.25	2.34	1.72
	<i>SD</i>	1.05	1.14	1.27	0.97	0.81
容易さ	<i>M</i>	2.19	1.78	1.81	2.19	1.53
	<i>SD</i>	0.93	0.91	0.82	0.82	0.62

M = 平均値, *SD* = 標準偏差

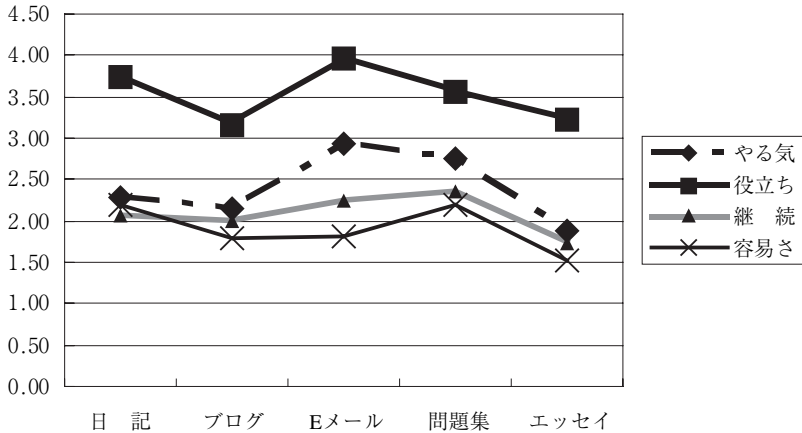


図 13:「自己向上群」(ライティング)

表 35:「自己向上群」の要素間の相互相関(ライティング)

	やる気	役立ち	継続	容易さ	目標	英語力
やる気	—	.464**	.765**	.439**	.361**	.244**
役立ち		—	.369**	.305**	.203*	.184*
継続			—	.621**	.294**	.212**
容易さ				—	.148	.263**
目標					—	.141
英語力						—

* $p < .05$, ** $p < .01$

目標:目標4項目の平均値, 英語力:英語力(ライティング)

「自己向上群」の要素間の相互相関(表35)をみると、「やる気」と「継続」の間の相関がかなり高く、「役立ち」、「容易さ」も「やる気」と中程度の正の相関を示している。

表36の重回帰分析結果からは、「容易さ」は「やる気」に有意な影響を及ぼしていないように思えるが、「継続」と「容易さ」の相関の高さから考えると、

表 36 : 「自己向上群」の重回帰分析結果
(ライティング)

なんとなく群	
	β
目標	.130*
英語力	—
役立ち	.196***
継続	.654***
容易さ	—
R^2	.638***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$ β : 標準偏回帰係数

学習方法に対して簡単だと思えることが続けられるという気持ちに影響を与え、それがやりたいという気持ちに働きかけているのではないかと考えられる。また、「目標」が「やる気」に影響していることも示されており、具体的な目標を持たせるということも「自己向上群」のやりたい気持ちを高めるために有効であると考えられる。

表 37 と図 14 は「仕方なし群」についての分析結果である。特徴的なのは、全てにおいて数値が低いことである。また、どの学習方法も「あまり役に立たない」「どちらでもない」と考えられている。その中でも「Eメール」については、他よりもやや高い数値を示している。これは、相手がいることで続けやすいことと同時に、コミュニケーションのできる学習方法であることに若干の興味を示していると解釈できるのではないかと考えられる。

「仕方なし群」の要素間の相互相関に特徴的なのは、「やる気」と「容易さ」の間の相関の高さである。また、「英語力」と「容易さ」の間にも中程度の正

表 37 : 「仕方なし群」の平均値と標準偏差 (ライティング)

		英文日記	ブログ	Eメール	問題集	エッセイ
やる気	<i>M</i>	1.63	1.25	1.75	1.50	1.42
	<i>SD</i>	0.88	0.44	0.99	0.72	0.72
役立ち	<i>M</i>	3.04	2.75	3.17	2.63	2.50
	<i>SD</i>	1.20	1.26	1.40	1.24	1.32
継続	<i>M</i>	1.25	1.33	1.75	1.33	1.21
	<i>SD</i>	0.44	0.56	1.03	0.64	0.41
容易さ	<i>M</i>	1.50	1.33	1.33	1.63	1.38
	<i>SD</i>	0.66	0.56	0.56	0.71	0.82

M = 平均値, *SD* = 標準偏差

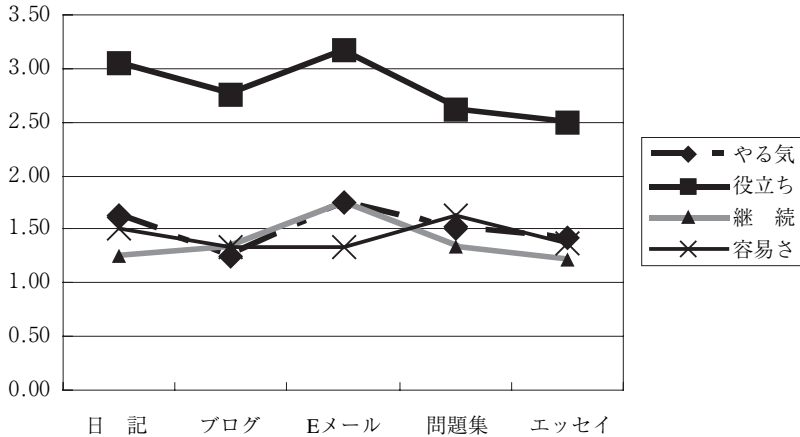


図 14: 「仕方なし群」(ライティング)

表 38: 「仕方なし群」の要素間の相互相関 (ライティング)

	やる気	役立ち	継続	容易さ	目標	英語力
やる気	—	.420**	.579**	.509**	.317**	.244**
役立ち		—	.321**	.161	.279**	.086
継続			—	.493**	.314**	.289**
容易さ				—	.244**	.430**
目標					—	.286**
英語力						—

* $p < .05$, ** $p < .01$

目標: 目標 4 項目の平均値, 英語力: 英語力 (ライティング)

の相関が見られる。

表 39 の重回帰分析結果においても、「容易さ」が「やる気」に影響を与えていることが示されているが、他の群と異なり「継続」からの影響が小さいことがわかる。すなわち、「仕方なし群」にとっては、「簡単だ」と思えることがやりたいという気持ちには非常に重要であると考えられることができる。

表 39:「仕方なし群」の重回帰分析結果
(ライティング)

	なんとなく群
	β
目 標	—
英語力	—
役立ち	.261***
継 続	.350***
容易さ	.295***
R ²	.462***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$ β : 標準偏回帰係数

5. お わ り に

本研究では、学習動機クラスタ別にリーディング、ライティングの学習方法に対する分析結果を見てきた。どのクラスタも大まかには共通した特徴を示していたが、それぞれにある程度の独自の特徴を示していた。ここでそれぞれのクラスタごとにまとめておきたい。

まず、全体的に明確な動機がなく、なんとなく学習している「なんとなく群」が受容技能であるリーディングの学習方法をやりたいと思うかどうかは、その学習法を続けられるかどうか为主要因となっており、次に役立つと思えるかどうかの影響していることが明らかとなった。また、続けられるかどうかは、その学習方法が容易なものかどうかが大きく関係していることも示された。一方、ライティングのような発信技能の学習の場合は、続けられることが主要因であることはリーディングの学習方法の場合と変わらないが、同時に学習の目標や役立つかどうか、やりやすいかどうかなどが複合的に関わっていることが明らかとなった。発信技能は自分が英語を産出しなければならないため、続けられるかどうか、役立つかどうかという判断に加えて、やりやすいかどうかややる気に関わっており、同時に他者とのコミュニケーションを伴う活

動も含まれていることから、英語学習の目標が関係しているのではないかと考えられる。

次に、英語がわかれば楽しい、使えれば便利というのが中心的な学習動機であった「便利群」は、リーディングの学習方法については、続けられるかどうかややりたいと思うかどうか非常に大きな影響を与えており、役立つと思うかどうかは多少影響を及ぼしていることが明らかになった。「便利群」はライティングの学習方法についてもリーディング同様に、続けられるかどうかを重要な要因としており、役立つかどうかは少し影響を与えていることが明らかとなっている。そのため、この群の学習者に対しては続けられそうだと感じさせることがやる気を持たせるために重要であることが示されたと言える。

「自己向上群」は、英語がわかるようになれば楽しい、使えれば便利、検定等で良い成績を取りたい、人からも褒められたいというように4クラスタの中でも動機付けが高い群であった。この「自己向上群」についても、受容技能のリーディングについては、学習方法をやりたいと思うかどうかは、続けられるかどうかは主要な要因であり、役立つかどうかは少し影響を与えていることが明らかになった。そして、続けられるかどうかはその学習方法がやりやすいかどうかと関係があることも示されている。一方、ライティングの学習方法については、それに加えて学習目標が高いかどうかはやる気に影響を与えていることが明らかになっている。すなわち、自己向上群の学習者に対しては、続けられると感じさせるだけでなく、具体的な目標を持たせてやることが、学習方法に対するやる気を高めるのではないかと考えられる。

人がするから仕方なく勉強するという動機（関係志向）だけが高い「仕方なし群」は、そもそも学習方法全般にやる気がないことが示された。しかし、やはりそれでも続けられそうかどうか、役立つかどうかはやる気に影響していることは明らかになった。また、ライティングの学習方法においては、簡単かどうかは一つの要因であることも明らかになった。英語教師が最も頭を悩ます層がこのグループであろうと考えられるが、すべての学習者に共通する「続けら

れるかどうか」は、このような動機付けの低い学習者グループに対しても重要であることがわかった。そのため、このグループの学習者に対しては、容易さも考慮しながら、まずは続けられる学習方法を勧めることが良いのではないかと考えられる。

以上、学習動機のタイプ別に学習方法へのやる気に働きかける方法についてまとめたが、本研究で得られた最も重要な教育的示唆は、ある学習方法をやりたいと思わせるためには、それを継続できると感じさせることが非常に重要である、ということである。すべてのグループがリーディング、ライティングに関係なく、その学習方法を継続できるかどうかをやりたいと思うかどうかの主要因としていた。つまり、教師がどれだけ役立つ学習方法、効果がある学習方法を勧めても、それだけでは学習者はやりたいとはなかなか思わないことが明らかになったと言えるだろう。そのため、学習者に学習方法を勧める際には、どのようにしたら続けられるのかの工夫を合わせて教示したり、定期的に学習のリズムを持たせるような計画を提示することが重要であると考えられるのである。

本研究の課題として、調査対象となった学生の多くが比較的英語を苦手としている学生であったために、学習者のタイプがある程度偏ってしまったことが挙げられる。そのため、今後、英語関連学部の学生に対して調査を行うなどして、学習動機の高い群を加えた上で、再度分析を行う必要があるだろう。また、本研究では「続けられそう」と感じさせることが非常に重要であることが明らかとなったが、どのようにすれば学習者にそのように感じさせることができるのかは明らかではない。そのため、さらなる調査によって、学習者が続けられそうだと感じる要因についても探る必要があると考えられる。

参 考 文 献

青木信之・樋口慎一・池上真人 (2001) 「日本人大学生が求める英語学習方法」『中国地区英語教育学会研究紀要』31, 21-30.

- 青木信之・池上真人・樋口慎一・永堀瞳 (2002a) 「日本人大学生が求める英語学習法Ⅱ－英語学習の目標及び英語力との関係」『中国地区英語教育学会研究紀要』32, 127-135.
- 青木信之・樋口慎一・池上真人・永堀瞳 (2002b) 「日本人大学生が求める英語学習法Ⅲ－学習意欲を左右する要因」『中国地区英語教育学会研究紀要』32, 137-146.
- 池上真人, 青木信之, 永堀瞳, 加納亜弥 (2002) 「日本人大学生が求める英語学習法－学習意欲と情意的要因の関係－」中国四国教育学会『教育学研究紀要』48, 126-131.
- 池上真人, 青木信之, 永堀瞳, 加納亜弥, 樋口慎一 (2003) 「日本人大学生が求める英語学習法Ⅳ－学習者の内的基準と学習意欲－」『中国地区英語教育学会研究紀要』33, 71-80.
- 市川伸一 (1998) 『認知カウンセリングから見た学習方法の相談と指導』ブレーン出版
- 英語教育実態調査研究会 (1993) 「21世紀に向けての英語教育」『英語教育別冊』大修館
- 竹内 理 (2003) 『より良い外国語学習法を求めて 外国語学習成功者の研究』松柏社
- 広島大学教育学部英語教育研究室 (1997) 「高校生の英語学習意識(4)」広島大学英語教育学会『英語教育研究』40, 52-123.
- 堀野緑・市川伸一 (1997) 「高校生の英語学習における学習動機と学習方略」『教育心理学研究』45, 23-29.
- Maeda, H. (2003). Structure of Learning Motivation of Japanese High School EFL Learners. *ARELE*. 14, 61-70.
- Oxford, R. (1989). Use of language learning strategies: a synthesis of studies with implications for strategy training. *System*. 17(2), 235-247.
- Oxford, R. (1990). *Language Learning Strategies: What every teacher should know*. New York: Newbury House.